

文化の多様性と通底の価値

— 聖俗の拮抗をめぐる東西対話 —

服部 英二

目次

21世紀のキーワード「文化の多様性」
文化の多様性に関する国際条約の成立
こころの領域に市場原理を認めず
通底の価値を求めて
何が討議されたか？

キーワード：文化の多様性、通底の価値、ユネスコ

2005年11月7日～9日、国連教育科学文化機関（ユネスコ）が、日本外務省・国際交流基金の協力のもと、道徳科学研究センター及び国際日本文化研究センター（日文研）と共催した表題のシンポジウムはどのような意味をもつのか、その背景をそこで行われた討議内容の分析と共に報告したい。

21世紀のキーワード「文化の多様性」

戦争の世紀であった20世紀が幕を閉じ、国連が希望をこめて「文化間の対話の年」と指定した新世紀の幕開け2001年に9・11事件が起きる。ただちに報復を叫んだブッシュ大統領により世界は「敵につくか、味方につくか」の二者選一を迫られる。人々は「文明の衝突」に思いを馳せた。

歴史を振り返れば、一文明が成熟し、その版図を広げ、成長を止め



開会式の様子

左より演壇にステヌーユネスコ文化政策部長、ボワイエ仏ユネスコ国内委事務局長、筆者、廣池理事長、松浦ユネスコ事務局長、リヴィエール官房長、グーシャ社会科学・哲学課長（最前列に佐藤大使）

た時、たとえその世界システムによる PAX という平和が存在しようと、そこに閉塞感が漂う時がある。原理主義が姿を現すのはそのような時である。20世紀後半から、パクス・アメリカナの中で潜行していた二つの原理主義が表面に姿を現したのが9・11であった。それに続くアフガニスタン攻撃、イラク侵攻では数十万の人命が失われ、しかもそれは未だ止むことを知らない。双方に自らの正義のみが世界の正義である、との思い込みがある。「彼らは文明に対して戦いを挑んだ」とのブッシュ氏の言葉、「世界はいまや二つに分かれた。神を信ずるものと、神を信じないものと」というオサマ・ビンラディン氏の言葉が端的にその状況を映し出している。この双方、特に前者に

1) 原理主義とは本来は純粋に原点に還る精神運動（Purism）で、12世紀の南アジアの上座部仏教の台頭、16世紀のヨーロッパの宗教改革もこの範疇に入る。しかし最近では宗教的武闘派を指すようになった。

他者に対する無知と傲慢が露出している。皮肉なことにアルカイダの思想はそれを知らなかったイラクに輸出され、テロを激化させた。闇と戦う光という、既に過去のものとしたゾロアスターの思想は、その二元論を克服してこそ世界宗教となり得たキリスト教、イスラームを奉じるものによって奇妙な復活を遂げたかに見える。

文化の多様性の尊重というテーマは、2001年11月のユネスコによる世界宣言で初めて登場したのではない。1945年ロンドンで採択されたユネスコ憲章の前文に、この国連機関の設立に至った議論の中核が集約されている。「相互の風習と生活に対する無知が、人類の歴史を通じて世界の諸民族間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、そのための諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。」

第二次大戦の最中、ロンドンに集った知性はすでに「戦争の原因は相互の文化に対する無知」であったと言い切っているのだ。この反省がこの憲章の冒頭を飾る「戦争は人のところの中で始まるものであるから、人のところの中にこそ平和のとりでを築かねばならぬ」という有名な一節に結晶されたのであった。

初代事務局長となったジュリアン・ハクスレーが、この精神に従って推進したのが「東西の対話プロジェクト」であった。これは文化情報の西から東への一方通行を正そうというもので、これにより世界はインドの遺跡群を知り、日本文学という脈脈の存在を知ることとなる²⁾。以来ユネスコは文明多元論の立場に立ちながら数々の会議や研究プロジェクトを遂行してきた。

今回のシンポジウムをその内容からユネスコ創立六十周年記念事業の一つと位置づけ、自ら開会することを引き受けてくれた松浦晃一郎事務局長は、その開会の辞で「文明間の対話はユネスコの一貫した姿勢であった」と述べたが、この意味が最も明瞭となったのは、氏が引

2) アンドレ・マルローは「アジャンクラー、それを私はユネスコによって知った」と筆者に語ったが、「雪国」のユネスコ版が川端康成のノーベル賞受賞につながり、それが欧米による日本文学研究に発展する。

用した「シルクロード=対話の道総合調査」であったといえよう。1985年に始まりのちに国際年の名称にまで成長するこのプロジェクトのキーワード「文明間の対話」は、多分に文化の多様性を意識したものである。対話とは出会いである。出会うべき、すなわち敬意を払う他者が存在しなければならない。「文明は出会いによって子を孕む」³⁾のである。すなわち文明の対話とは Mutual Enrichment であり Cross-Fertilization なのだ。それは「共成」である。「合成」ではない。いわんや「交渉」ではない。

文明の核を形造る文化は、他文化の存在を要し、他者との絶えざる交信によって、新たな自己を形成してゆく。しかもそれは双方向でなされる。人類文明はこのような対話の中で成長してきた。

この「自己は自らの存在のために他者=非自己の存在を必要とする」という認識は、1995年、東京の国連大学で行われたユネスコ創立五十周年記念シンポジウム「科学と文化—未来への共通の道」に基調講演として招かれたジャック・イヴ・クストーの証言に負うところが大きい。地上のすべての海・大河を調査したこの人は「生物の種の数が多いところでは生態系は強い。(南極のように)種の数の少ないところでは生態系は脆い。この原理は文化にも当てはまる」と言明したのである⁴⁾。地球環境問題と文化、いいかえれば「外的環境」と「内的環境」が結びついた一瞬であった。鶴見和子氏のいう如く、この証言が参加者全員に感銘を与えたのは、それが地球の隅々までを実地調査した人の口から為されたからである。そして東京で生まれたこの認識が2001年のユネスコ総会が満場一致で採択した「文化の多様性に関する世界宣言」の中核を成すものとなる。その第一条を引用しておこう。

「文化は時代と場所に依じて様々な形態をとる。この多様性は、人

類の構成する集団・社会を特徴付けるアイデンティティーの独自性・多様性に具現化されている。交流・革新・創造性の源泉である文化の多様性は、人類にとって、生物界におけるバイオ・ダイヴァーシティと全く同様に必要なものである。この意味において、文化の多様性は人類の共有遺産であり、現在ならびに未来の世代の利益のために認知され、主張されなければならない。」

この宣言の重要さは、これ迄異文化理解や寛容の対象とされてきた他文化の存在が、それどころか、自己自身の存在の必要不可欠の要因なのだ、と明示したところにある。自己は多数の非自己によって生かされている、との深い認識がここにはある。この宣言が世界人権宣言に次ぐ重要な宣言と評価された所以である。

文化の多様性に関する国際条約の成立

世界人権宣言の作成時と同じくこの宣言の準備に中心的役割りを演じたフランスは⁵⁾、9・11直後に満場一致で採択されたこの宣言をただちに条約化しようと動き出した。アメリカが18年間脱退していたユネスコへの復帰を表明したのは2002年の半ば、この宣言採択のわずか数ヶ月後である。当時イラク進攻をにらみ「アメリカ的価値に従わぬものは力で制圧する」という強硬なブッシュ・ドクトリンを打ち出していたアメリカが、同時に「良識の府」に復帰することに違和感を抱いた人は少なくないはずだ。勿論この決定には松浦事務局長による運営体制の健全化が力あったのだが、それにしても、一方で国連安保理の合意の有無しに関らずサダム・フセインの打倒を決めていた米政府が何故この時期にユネスコへの復帰を決めたのか？ その答えは文化の多様性に関する世界宣言、そしてその「条約化」に有る、と私は見ている。

「宣言」は道義的な呼びかけであるが拘束力をもたない。しかしそ

3) Roger Garaudy "Promesse de l'Islam" Ed. Seuil

4) クストーの発言の全文は「科学と文化の対話—知の収斂」(麗澤大学出版会)に収録されている。

5) 1948年の世界人権宣言の起草委員会を主導したのはフランスの法学者ルネ・カサン(René Cassin)である。

これが「国際条約」となれば、それは政治的拘束力をもつ。ブッシュ政権はその条約化を阻止すべくこの国連機関に復帰したのだ。2003年秋の正式復帰の時点でも未だユネスコ国内委員会すら整備されていなかったことが、その唐突な決定を物語っている。事実アメリカはただちにこの議論に参加、二年間に及んだすべての専門家会議、政府代表会議で猛烈な論戦を展開した。アメリカ的市場原理を推進するWTOもこの援護に動員された。

この条約の骨子は、文化すなわち心の領域を市場原理から切り離す、ということにある。そしてその論拠が2001年の前掲の宣言であった。グローバル化とはアメリカ化のことである、とよくいわれる。確かに金融システムや科学技術の領域でアメリカは世界を同化しつつある。しかし軍事的に突出したこの国は、第二次産業のすべてにおいて世界をリードしているのではない。その多くは日本、そしてアジアに移った。実はアメリカの10年来の最大の輸出品目は、自動車でも航空機でもなく、いわんや騒がれた牛肉ではなく、文化産業のコンテンツなのだ。ハリウッドや三大テレビ局を初めとする膨大なAV商品が世界を覆い、人びとの感性までも変えてゆく。映画タイタニックやインデペンデンス・デーの迫力がなければ人々はもはや満足しない。グローバリゼーションの最たるものは、モノではなく、文化すなわちこころの領域の画一化なのである。

こころの領域に市場原理を認めず

「文化の多様性に関する国際条約」（正確には文化的表現の多様性を保持し促進するための条約）は小委員会での激論を経て、2005年10月20日、第33回ユネスコ総会において148ヶ国の圧倒的賛成で可決された。反対は2ヶ国（米・イスラエル）、棄権はオーストラリア等の4ヶ国のみであった。共同提案国はフランス・ドイツを初めとするEU諸国、カナダ及び仏語圏アフリカ諸国であったが、イスラム圏も賛同した。注意すべきは米国追従を云々される英国や日本もこの時賛成に

廻ったことで、あの理不尽なイラク戦への参加の仕方とは一線を画したことである。力関係がものをいう安保理とは異なり、あく迄理性性が優先するこのユネスコという場では、国際社会は、モノとところを同一地平におき市場原理にゆだねることを拒否したのであった。この条約は30ヶ国の批准を経て発効するが、その日は近いであろう。

通底の価値を求めて

2005年10月のこの条約の可決を予測した私は04年春、松浦事務局長に大きな一つのシンポジウムをこの直後に開催することを提案した。そのテーマは「文化の多様性と通底の価値」である。なぜならば多様性擁護のこの動きは、一つ間違うと自閉的な文化産業の保護主義、ひいては国粹主義に転じかねず、それはこの宣言や条約の本義にもとるからである。あく迄も文明間の対話の本質、「共生」による「共成」を視野に入れておかねばならない。大小を問わずすべての文化の独自性を尊重しつつ、人類が共に生きるべき通底の価値、倫理の基礎を探る、その意味での眞の対話の場をつくる、という願いを込めての提案であった。

聖と俗との接点をも探るこのシンポジウムの軸として、私はあえてユーラシアの東西を選んだ。何故ならば9・11事件以来の文化間対話は西欧対イスラーム、日本対イスラームというようにイスラームを中心に展開され、私自身もその多くに参加したのだが、独自の価値の歴史をもつ東アジアと西欧の対話という場はきわめて少なかったからである。

幸いにもこの提案は松浦ユネスコ事務局長のみならず、同官房長フランソワーズ・リヴィエール女史、日本政府ユネスコ常駐代表部の佐藤禎一大使、外務省広報文化交流部長であった近藤誠一氏、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会事務総長井上正幸氏、日文研の片倉もと子所長及び安田喜憲・川勝平太両教授、麗澤大学比文研伊東俊太郎教授等からの巾広い賛同を得、更に国際交流基金から発表者の派遣、日

本語同時通訳ブースの開設の両面で貴重な援助を受けることが出来た。ユネスコ側からはカテリーナ・ステヌー文化政策部長、ムフィダ・グーシャ哲学・人文科学課長、パリの学界からは国立高等研究院 (EPHE) の前学長ジャン・ボベロ教授を初め、東洋言語・文明研究院 (INALCO)、国際哲学人文科学協議会 (CIPSH) フランス・ユネスコ国内委員会の面々が、そしてアメリカからは国際比較文明学会 (ISCSC) のマイケル・パレンシア=ロス教授が準備段階から参加してくれた。

何が討議されたか？

11月7～9日、ユネスコ本部の第四会議室には日・仏・米・中・韓、それにイスラム圏を代表してチュニジアから選ばれた28名の発表者、250名の傍聴者が参集した。五つのセッションが設定されたがそれは「歴史に見る東西の出会い」、「対話の担い手と手段」、「文化の多様性と価値の多元性」、「文化移転に見る現代性の影響」、そして「多様な世界における通底の価値」である。つまり文明間の対話の歴史的事例から出発して未来に〈対話の文明〉とも呼びうるものを創り出せるか、を問うものであった。討論を主体とするため、基調発表で15分、ディスカッサントは10分という厳しい時間制約がもうけられていた。会場からの質問も含めただちに討論に入るとこの方法は、優れた英・仏・日の同時通訳の存在によって、本当に語り合うシンポジウムの雰囲気をつくりだし、極めて良い結果を生み出したといえる。

冒頭、松浦晃一郎氏が、「文化の多様性に関する国際条約」が採択された直後のこの時点でこの主題を高く評価、ここから世界にメッセージが発信されることを望む、とその期待を表明したのち、ただちに発表に入り、先ずハーバード大の東洋哲学の権威ウェイミン・トゥ氏が、啓蒙思想の洗礼を受けた中国にも伝統的思想は根強く残っており、アジアのヒンドウ教・仏教・儒教・道教は哲学と宗教を分けず体験的思想であった、儒教は普遍的倫理の理想を語り、今も地球上に市

民権をもつ、と主張した。これは二日目ダニエル・エリセーフ女史 (高等社会科学研究院) の「マテオ・リッチの発見した儒教は革新的であった。ルイ14世の図書室には既に3000冊の中国文献があったが、西欧では東洋との出会いの一世紀後に意識の危機が起り、それが啓蒙思想を生み出した」との指摘に対応している。

パリ国立高等研究院名誉院長ジャン・ボベロ氏は、フランスのライシテ (政教分離政策) は宗教を超えた道德の可能性を問うものだが、ジュール・フェリーは仏教の中にキリスト教以外の道德の存在を見ていたこと、一木一草に靈 (仏性) が宿るとの思想はルソーの市民宗教に近く、また儒教とも通じる。ライシテのモラルは生を享けた祖先の崇拜をも可能にする、と表明し、このフランス独特の理念をぐっとわれわれの身近かに引き寄せた。

これに続きフランス国立科学研究所 (CNRS) の主任研究員であった石上美智子氏が通底するものの具体例として道元とアジジの聖フランチェスコの驚くべき類似性を取り上げ、仏教とキリスト教に「深みにおける出会い」が存在すると発表、一方ヘルムート・O・ロツテルムンド氏 (EPHE) は、「デウス如来」という言葉を紹介、明治期の日本にキリスト教への恐れがあった、と述べたが、16世紀のイエズス会の伝道と九州の藩主達の対応を考えるとそれは本来の日本人の対応ではない、との私の反論を招いた。

アメリカ、イリノイ大のマイケル・パレンシア=ロス氏は、Transversal という語そのものを検討、カトリック=普遍的 (Universal) の主張はモノローグであり、それが普遍的価値とされた時、破壊につながった、それに対し「通底=横断的」の観念は横糸が縦糸と交り乍ら独自性を保つもので、その価値は希望を残すもの、と評価した。

東洋言語・文明研究院長ジャック・ルグラン氏はモンゴル史の専門の立場から遊牧民の文明に果たした役割、文明移転について語り、彼らのもつ外に向う力を強調した。このノマドについての考察は最終コミニケにも触れられている。

外務省からこの会議に特別に派遣された東大寺華厳宗管長森本公誠氏は、大仏の台座の蓮弁に画れた世界の中心須弥山が単にヒマラヤの高山からの発想ではなく、イランにも類似の発想があったことを図示し、高みへの渴望が通底すると発表した。このイラン文明への着目は、その後「時」の概念を扱ったソルボンヌの比較宗教学者オドン・ヴァレ氏が、インダス河を境に東西で逆転する「循環する時と直進する時」の中間にイラン・インド社会があつた、と指摘したことと奇しくも重なり、更にチュニジアのベン・アリ大統領の設置になる「文明間の対話講座」の主任教授ムハマト・ハシン・ファンタール氏が主張し、多数の参加者が同意した「すべての文明に通底するのはル・サクレ（聖なるもの）への指向である」という重要な命題に結びつくものであった。尚オドン・ヴァレ氏が「時の直線は実は斜線であり、曲線は実は螺旋形である」と述べたのも興味深い指摘であった。

自ら「文明間の対話」という著作もあるフレッド・ダルマイヤー氏（ニューヨーク・ノートルダム大）のここでの発表はハーバースの理論を出発点としたもので、真の文化間の対話は実践的・倫理的・道徳的なものである時のみ有効となる、というものであった。

次いで登場した日文研の川勝平太氏は、古えからの真・善・美という通底の価値のうち、近代文明は真ついで善を中心にして来たが、未来型の文明は地球にやさしい美を基調とすべき、という本来の主張を展開し、強い印象を残した。私はユネスコ側コーディネーターと共に総括セッションでこの考えを最終コミュニケに入れるべく擁護したのだが、驚いたことにアルジェリア代表が激しく異議を唱えた。アラブ語では「美の文明」は意味を為さない、というのだ。イスファハンの美はどうなるのか、イスラームの至高の価値はやはり「正義」なのか、と一瞬思ったが、結局他の参加者に日・仏・英語でのその正当性を問い、モデレーターを務めていたリヴィエール官房長が括弧付きでこの語を残すことを提案、決着したのだった。

東京大の松井孝典氏は137億年を溯り、壮大な宇宙論を展開したが、

その宇宙時間の中に人類は10万倍の早さで進む「時間のサブ・システム」を創り出し、急速に地球の破壊を進めたと警告したが、これは川勝氏の論と相乗効果を持つものである。

それに続くパークレーの量子物理学者ヘンリー・スタップ氏の証言は更に重要である。95年の「東京からのメッセージ」に表われる「全は個に、個は全に遍照する」という曼荼羅に近い思想を最先端の科学者が抱いていることを万人が知ったのは、この人に負う所が大きい。彼は今回、人間観に焦点を当て、「古典科学では不可能であった道徳的価値・精神性の領域が最新の科学では開かれている」と明言したのである。

自然科学から環境の比較文明学に進んだ日文研の安田喜憲氏は、ここで発信すべきメッセージを持っていた。先ず「食が文明の性格を決める」に始まり、麦作牧畜民の自然破壊を稲作漁撈民の自然との共生を対比させ、万有に靈宿るとするアニミズムの基には「水の循環」があることを熱弁した。

アニミズムの見直しこそが地球を救うとのこの主張が、この語に先入観をもっている西欧人にはただちに受け入れられるものではないことは分っていた。しかし、「おかげさまで」「もったいない」という言葉、竹取り物語りにさかのぼって、日本人の生命観と結びつけた佐々木瑞枝氏（武蔵野大）に呼応するかの如く、知日家オーギュスタン・ベルク氏（高等社会科学研究院）が和辻哲郎の風土論の中に内と外を結ぶ〈場〉を考え、ハイデッガーの「死に至る存在」(Sein zum Tode) に対して「生に向かう存在」(Etre vers la Vie) としての人間存在論を展開、更にフランソワ・マセ氏 (INALCO) が、森の文明と神道の思想を語り、諏訪の御柱の意味を紹介するに及んで一つの収斂が生まれたといえる。事実他の参加者からも遍在する Anima (靈魂=命) の指摘がなされ、これらの討論もコミュニケに収録されている。

この議論は、「土塊 (アダム) に神が息を吹き込む (animer) こと

によって人が誕生した、その限り人は神を分有する」、と指摘したファンタール氏が「イスラームの塔ミナレットは天と地を結ぶもの」と述べた時一つの頂点に達した。安田氏が先程の樹＝柱（ひもろぎ）の考えに触発されたのではないか、とたずねたが、それが本来のものとの答えであった。更にカトリックではどうかと聞かれたバチカン代表フランチェスコ・フォロ卿が、神が天と地を創ったのだから、と教会の塔にもその性格を認めると会場にはざわめきが始まった。

アニミズムから塔に至るこの一連の議論は、一見異質に見える一神教と多神教の間には実は隔絶した距離はなく、聖なるものが他に反映し、一者が様々な形で万有に顕れるその姿の捉え方の問題に帰することを示唆するものであった。フォロ卿は自らの発表で神のいのちに与ることの大切さを説き、またすべての状況で良心の自由こそ尊重すべきと述べたが、この「良心の自由」こそ、かつて教会の権威を否定したライシテの求めたものであったことを思うと、時の移りを感じさせた。

また、公共哲学をリードする山脇直司氏（東京大）は、「和」という語を『春秋』における本義から「和らぐ」という女性原理に至るまで解説、特に「和して同ぜず」の精神が未来的価値だと説いた。氏によるとこの語は「調和」から更に「和解」にまで意味を上げうるといふ。これに対応してアミタイ・エチオーニ氏（ジョージ・ワシントン大）もコミュニタリアンの立場から個人主義を批判し、東西の価値観の統合の可能性を説いた。

最後に岩佐信道氏（道徳科学研究センター・麗澤大）はここでコールバーグの道徳六段階説から広池千九郎の「相互依存のネットワーク」の考えを紹介、生物のみならず万有が相互に結ばれて存在することの自覚が、慣習を脱した道徳の地平を開くことを示唆した。

私自身が初日に行った基調報告は最終コミュニケにも多く収録されているのでここで詳述しないが、「文明は衝突しない。無知が衝突する」、故に「ユネスコの第一の使命は無知との闘いである」ことに注

意を喚起し、シルクロードの交易が1500年に亘って続き、人類文明の発展に貢献したのは、それに関わったすべての民族に他文化への敬意があったためであることを、パクス・ロマーナと漢、パクス・イスラミカと唐の関係を引ながら解説、16世紀が失い、21世紀が取り戻すべきは異文化間の「互敬の精神」であり、それこそが「互恵」に他ならない、というものであった。フレッド・グルマイヤー氏や韓国のチャ・インスク氏（国際哲学・人文科学会議議長）が高く評価してくれたことが嬉しかった。

総じて、このシンポジウムの内容が極めて濃いものであったことはユネスコの内部報告書にも明らかである。かつて各所で見られたような東西の価値観の対立は起らず、「文明の同質性は異差性よりも大きい」とのトインビーの言葉を裏書きするかの如く、会場には精神の収斂が見られた。また日本の論客がこれ程結集して日本的価値の普遍性を世界に問うたのも前例がない。ここで提起された日本的靈性あるいはアニミズムの評価には未だ深化の余地があるが、2006年7月パリの世界比較文明学会はそれを補うはずである。

更に廣池幹堂理事長が会場で表明した如く、近い将来次回のシンポジウムが日本で開かれることになれば、更に高度の知的連帯が生まれるかも知れない。

国連の良心といわれるユネスコは、日本人である松浦事務局長のもと、上述の文化の多様性に関する世界宣言と同条約に先立ち、2004年には途上国の圧倒的支持を受けて「無形文化財の世界遺産化」という重要な決議を行っている。目に見え手で触れられるモノの世界から目に見えないこころの世界へと方向を転換しつつあることに気づかねばならない。この領域での存在感のある知的協力こそが日本の文化外交の指針となるべきであろう。

国際シンポジウムの日程

11月7日(月)

開会 開会の挨拶(松浦晃一郎(ユネスコ事務局長))

第1セッション—歴史に見る東西の出会い(座長:ジャン・ピエール・ボワイエ(フランス・ユネスコ国内委員会事務局長))

基調講演:「啓蒙の精神」を超えて:人間宇宙学の見直し(杜維明(アメリカ/ハーバード大学イエンチェン研究所所長/東アジア思想)、「フランスのライシテにおける文化移転の影響」ジャン・ボベロ(フランス/パリ国立高等研究院教授/ライシテ倫理))

パネリスト:「[アテウス如来]と明治期の日本におけるキリスト教への恐怖」ヘルムート・O・ロツテルムンド(フランス/パリ国立高等研究院教授/比較思想)、「仏教とキリスト教:深みにおける出会い」石上美智子(日本/パリ国立科学研究所/比較思想)、「ユニバーサルイズムとトランスパーサーリズム:世界を指向した対話と対話倫理」マイケル・パレンシア・ロス(アメリカ/イリノイ大学/比較文明)

ディスカッション

第2セッション—対話の担い手と手段(座長:カテリーナ・ステュー(ユネスコ文化政策・文化間対話部長))

基調講演:「文明間の対話の道としてのシルクロード」服部英二(日本/ユネスコ事務局長官房特別参与、道徳科学研究センター研究主幹)、「社会システムと価値システム:対話の道の主役としての遊牧文化」ジャック・ルグラン(フランス/東洋言語・文化研究院院長/モンゴル文化)

パネリスト:「シルクロードの異なった文化に見る宇宙観の共通基盤」森本公誠(日本/東大寺管長/比較文化)、「文化間対話の諸様式」フレッド・ダルマイヤー(アメリカ/ニューヨーク・ノートルダム大学教授/比較哲学)、「真・善の文明から美の文明に向けて」川勝平太(日本/国際日本文化研究センター教授/比較経済史)

ディスカッション

ユネスコ日本政府代表部主催レセプション

11月8日(火)

第3セッション—文化の多様性と価値の多元性(座長:ムフィダ・グーシャ(ユネスコ哲学・人文科学課長))

基調講演:「地球システムの視点から見た現在の文明と人間の新しいヴィジョン」松井孝典(日本/東京大学教授/宇宙学)、「道徳論の基礎としての人間存在に関する科学的概念」ヘンリー・スタップ(アメリカ/カリフォルニア大学バークレイ校/量子物理学)

パネリスト:「[時]の概念:循環か?直線か?」

オドン・ヴァレ(フランス/ソルボンヌ大学/比較宗教)、「綿作・漁労文明のエートスに見る持続可能性」安田喜憲(日本/国際日本文化研究センター教授/環境考古学)、「日本の義と神社」フランソワ・マセ(フランス/東洋言語・文化研究院教授/日本文化)、「言語の視点:日本語における文化的差異と普遍性」佐々木瑞枝(日本/武蔵野大学教授/比較言語)

ディスカッション

第4セッション—文化の移転に見る現代性の影響(座長:フランソワーズ・リヴィエール(ユネスコ事務局長官房長))

基調講演:「儒教的価値:現代ヨーロッパの誘惑」ダニエル・エリセツ(フランス/高等社会科学研究院教授/東洋学)、「極東における共通の価値の進展」キム・エルス(韓国/前ユネスコ韓国国内委員会事務局長/哲学)

パネリスト:「現代的存在論のトポスの限界を超えた和辻哲郎の『人間』観」オーギュスタン・ベルク(フランス/高等社会科学研究院教授/比較文化)、「中国の歴史文化財保存における現代性の影響」安家瑤(中国/中国社会科学院/比較文化)、「地球化時代の生活様式の“Mundialization”」チャ・インスク(韓国/国際哲学・人文学会議会長)、「キリスト教の価値観と現代性:良心の称賛」フランチェスコ・フォロ卿(ヴァチカン/ヴァチカン大使)

ディスカッション

11月9日(水)

第5セッション—多様な世界における通底の価値(座長:服部英二(道徳科学研究センター研究主幹))

基調講演:「平和の文化に向けての[和]の概念の刷新」山脇直司(日本/東京大学教授/社会学)、「東洋・西洋の価値観のグローバルな統合を目指して:コミュニタリアンのアプローチ」アマタ・エチオーニ(アメリカ/ジョージ・ワシントン大学教授/コミュニタリアニズム理論)

パネリスト:「ユーラシアの大文明における伝統的な宗教言語の重要性」ジャン・N・ロバール(フランス/パリ国立高等研究院教授/日本仏教)、「イスラム世界における人間」ムハメド・H・ファンタール(チュニジア/チュニス・エルマナール大学教授/思想史)、「通底の価値の基礎としての相互依存のネットワーク」岩佐信道(日本/道徳科学研究センター長)

ディスカッション

閉会 最終コミュニケの発表と採択(報告委員:ルカ・M・スカランティーノ(イタリア/国際哲学・人文学会議事務局長))

パリ国立高等研究院主催レセプション



国際シンポジウム

文化の多様性と通底の価値
— 聖俗の拮抗を廻る東西対話 —

最終公式声明

ユネスコ60周年記念事業として、2005年11月7日から9日まで、パリのユネスコ本部において、国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値—聖俗の拮抗を廻る東西対話—」が開催された。

本シンポジウムは、ユネスコの社会人間科学局(哲学・人文科学セクション)と文化局(文化政策・文化交流部)、及び以下の7つの機関の共催・協力により企画された。日本からは、服部英二氏(ユネスコ事務局長官房 特別参与、道徳科学研究センター 研究主幹)のお力添えにより、国際日本文化研究センターと道徳科学研究センターが本シンポジウムを共催した。この他の協力機関は、フランスユネスコ国内委員会、国際哲学・人文学会議(ICPHS)、パリ国立高等研究院、国立東洋言語・文明研究院(INALCO)、国際比較文明学会(ISCSC)である。さらに、本シンポジウムは、日本のユネスコ常駐代表部、外務省、国際交流基金、日本ユネスコ国内委員会からの後援を得ている。本シンポジウムは、松浦晃一郎ユネスコ事務局長の開会の挨拶により始まった。

1957—66年の「東西の文化価値の相互理解プロジェクト」から50年目を迎え、また「シルクロード総合調査計画」から20年経った今、本シンポジウムは、世界(とりわけヨーロッパとアジアの東西両端)における、文化の多様性の豊かさと脆弱性に焦点を当てることと、この地理的に異なる二つの文化を結びつける共通の価値を再考することを目的としたものであった。様々な分野と文化からの研究者たちが集い、5つのサブテーマ(①歴史にみる東西の出会い、②対話の「担い手」とその手段、③文化の多様性と価値の多元性、④文化の移転に与える現代性の影響、⑤多様な世界における通底の価値)に関連付けて、その経験と見識を共有することができ

た。

当初、この企画は学際的な会議に固有な限界と時間的な制約により、それぞれのテーマについて深いレベルで探求することができないのではないかと懸念されていた。しかし実際には、本シンポジウムで話し合われた成果はまことに実り多いものとなった。それは、発表者たちに、今後の研究や調査の方向性を示し、過去にさかのぼるとともに、新境地を開く根本的な論点を浮き上がらせた。それはまさしく、国連で唯一文化を担う機関としてのユネスコが今日問わなければならないものであった。

参加した専門家たちは、現代社会における生き方や考え方に影響を与えている観念や文化の刷新を促すような新しい対話の道筋を特定した。とりわけ、世紀を超えて断続してきた対話の根底にあるものとしての世俗性と精神性の次元に重点が置かれた。実際、世界中で多くの誤解の基となっている聖俗間の緊張を考えると、普遍的な (universal) 価値というよりは、文化間に「通底する (transversal) 価値」がいかに異文化間の相互学習に道を開いているかということに関心をもちたい。この通底する価値は遠く離れた文化の括がりの掛け橋になり、多様な文化遺産を持った社会間の対話や理解の基礎となりうる。通底する価値は、二つ以上の文化によって共有されるものであり、普遍的な人間教育や根源的な「聖なるもの」への志向のように、特定の宗教的な表現を超え、その根源に遡るものである。この他にも日本の哲学的な言葉遣いから検証された価値もある。例えば「和」の概念とは、「異なるものの調和」であると同時に、「和解に基づいた平和」を意味するものであり、「和して同ぜず」とは同化することなく調和することを意味している。これらのすべての価値は人類社会の共有遺産といえるだろう。

今、この問題をこのような仕方提起することは、異なる文化や文明に住む人々の互敬を促す世界的な土壌づくりに貢献するものである。

以下に挙げる考察は、具体的な行動を導くものであり、本シンポジウムで話し合われたものの中でも特に注目すべきものである。

—文化の多様性は、真の対話のために必要な材料である。民族、文化、文明間のあらゆる交流の源流におかれるこの根本的条件なくしては、国際協力や相互理解に向けたいかなる試みも不可能であろう。この意味に

において、文明間の出会いとは特に長い時間を要するものである。文明が衝突するのではなく、「文明に関する無知」が紛争を招くのである。例えば、創世神話は、不動の一枚岩のように考えられがちであるが、人類の共有する精神志向とその交流に負うところが大きい。同様に、科学は、宗教や精神性とは相容れないものだと長年にわたって考えられてきたが、20世紀に発表された理論に基づけば、自然や人間の概念、また自然における人間の役割などに、未知なる領域や要因が遍在し、作用していることが証明された。この未知なる領域や要因への気づきは、思考の二つの顕れ、すなわち科学と目に見えない精神的次元に共通する基盤を与えるものであり、ここから両者の対話が可能となる。

—対話とは、各々の論理システムをぶつけ合うことを厭わない二人以上の人間による思考の妥当性を検証する一つの道具である。それはデリケートな行為である。というのも、対話には、話し手にとって自らの考えが変わるかもしれないというリスクを伴うからである。対話とは、思考のプロセスを再考し、確信されてきたものを再吟味し、新たなものを発見しつつ前進する、日々に新たな手段である。それゆえに、対話の効能をこう再確認すべきであろう。それは旅に出ることであり、対決であり、試練であり、変容である。中でも強調すべきは、対話の持つ改善力である。それは、それぞれが自らの文化から外へ向かい、自らを解放し、通底する世界に身を投じるための手段である。このような意味で、「文明間の対話」から「対話の文明」へと移行することが示唆されたのであった。

—文化移転は、実際の、あるいは作り出された必要性に応じて、起こることが多い。外来の文化の厳しい受容として理解されている近代化は、文化の移行の概念とよく関連付けられてきた。かくして、諸々の文化・文明間に「文化的統合」が為されてきたのである。この点について、言語や翻訳の果たす役割が強く再確認された。そこからして文化間の出会いと交流とが実り豊かなものになるための、対話の条件とあり方を定義することが必要となる。この意味において、文化移転における運搬者の重要性は明らかである。運搬者は、文化的要素を運ぶと同時に、変形させるのである。

—対話のための理想的な場としての「道」の概念は、ユネスコの事業により長い時間をかけて育成されたものである。単に何世紀にもわたって

行われてきた文化間の対話の歴史や地理を示しているだけでなく、未来をどのように考えるべきかということにも寄与している。見過ごされてきた文化の出会いや相互作用は、つきつめると、現在までなされてきた通説よりも遥かに古い昔にさかのぼる。

—遊牧文化は、文字通りの意味でも、比喩的な意味でも、特異な反省の場を提供してくれる。その文化交流の複雑さや分散が、グローバリゼーションがもたらしたものと類似している。遊牧文化は、絶え間のない移動の必要というよりはむしろ拡散という特徴をもっており、それは土地の耕作や蓄積と対峙するものである。それにより、遊牧民は結束感を育み、継続的な交易を余儀なくされ、それによって、人々は自らの固有の土地から引き離されるが、根無し草になるのではなく、絶えずその土地に回帰し、再所有するのである。グローバリゼーションが文化を画一化する危機を募らせ、また、すべての文明をその本来の基盤である地球から切り離す危機が高まっている現在、土地や環境の特殊性を考えることがますます重要になってきている。同様に、自らの文化に対する愛着は、他の文化との接触により豊かなものになるし、それが自らの文化に絶えず生命を吹き込み、悲惨な形骸化を防ぐことにもなるのである。

—「美の文明」と審美的な視野が、「善」と「真」をイデオロギ-の前提とした論説が広く定着したことから生じた行き詰まりを打破できる、有望なもう一つの議論の軸であることが認識された。まさしく「善」や「真」の概念に基づいた教義により現代の多くの危機が引き起こされている状況を目にすると、「美」は価値論的な論説を超える可能性として表れてくる。美と審美的な世界は、感覚的であり、移転可能であるというその特質によって、加速するグローバリゼーションによっていつそう盛んになりつつある文化交流において最も実り豊かな領域となるであろう。最近採択された「文化表現の多様性の保護と推進に関する国際条約」はその例証である。

人間の実存は、近代的個人の限界を超えて再考されなければならない。「生に向かう存在」のパラダイムによって、人間存在は、その対話の相のもと、通底し、結ばれる存在として未来に引き継がれる。それは、人間存在を、生命圏の中で、生命の循環を保障するという至上命令に向かって開くものである。



International Symposium

*Cultural Diversity and Transversal Values:
East-West Dialogue on Spiritual-Secular Dynamics*

7-9 November 2005
Paris, UNESCO Headquarters

FINAL COMMUNIQUE

In conjunction with UNESCO's sixtieth anniversary, an international symposium entitled "Cultural Diversity and Transversal Values: East-West Dialogue on Spiritual-Secular Dynamics" took place at UNESCO Headquarters in Paris from 7 to 9 November 2005.

This symposium was coordinated by the Social and Human Sciences Sector (Philosophy and Human Sciences Section) and the Culture Sector (Division of Cultural Policies and Intercultural Dialogue) at UNESCO in cooperation with seven institutions: the International Research Center for Japanese Studies and the Research Center for Moral Science (Japan) under the impetus of Eiji Hattori, Deputy Director at the Research Center for Moral Science and Chargé de mission to the Office of the Director-General of UNESCO, the French National Commission for UNESCO, the International Council for Philosophy and Humanistic Studies (ICPHS), the Ecole Pratique des Hautes Etudes, the Institut National des Langues et Civilisations Orientales (INALCO) and the International Society for the Comparative Study of Civilizations (ISCSC). Additional assistance was provided by the Permanent Delegation of Japan to UNESCO, the Ministry of Foreign Affairs of Japan, the Japan Foundation and the Japanese National Commission for UNESCO. The symposium was inaugurated by Mr Koïchiro Matsuura, Director-General of UNESCO.

Coming fifty years after the launching of the "major project on

the mutual appreciation of East-West cultural values" (1957-1966) and twenty years after the "Silk Road" project, this symposium aimed at highlighting the richness and fragility of cultural diversity in its various expressions, particularly in Europe and Asia, while also recalling the common values capable of bringing together these two distinct geocultural areas. Researchers from various fields and cultures were able to share their experiences and viewpoints in relation to five themes: (1) The East-West Encounter in History; (2) Mediators and Means of Dialogue; (3) Cultural Diversity and Plurality of Values; (4) The Impact of Modernity on the Transfer of Cultures; and (5) Transversal Values in a Diverse World.

From the outset, this undertaking ran the obvious risk of being unable to explore each of these themes in depth, given the limitations inherent in such interdisciplinary exercises and the usual time constraints. Nevertheless, this meeting proved to be very productive: indeed the participants were able to distinguish new lines of investigation, a blend of fundamental debates, either recurrent or new, which more than ever before concern UNESCO, as the sole agency in the UN system responsible for culture.

The participants suggested new avenues of dialogue allowing for a renewal of the flow of ideas and cultures that influence ways of being and thinking in contemporary societies. Special emphasis was placed on the notions of temporality and spirituality underlying this age-old dialogue forged from ruptures and continuations. Indeed, considering the spiritual-secular tensions at the heart of many global conflicts, we are compelled to question how transversal, rather than universal, values can lead to mutual learning. These transversal values thus serve to bridge distant cultural horizons in addition to providing a possible basis for dialogue and understanding between societies with diverse cultural heritages. Transversal values are those that are shared by two or several cultures as, for example, universal education and the aspiration towards the primordial "sacred", which extends well beyond specific religious expressions. Other values were examined from the

perspective of Japanese philosophical language. Among them, the concept of "Wa", which can be translated as "harmony among differences" but also "peace based on reconciliation", and "Wa shite Do zezu", a term referring to the state of being in harmony without assimilation. All of these values belong to the common heritage of humanity.

By addressing this question in such terms and at the present time, we are contributing towards creating a global environment of mutual respect among peoples of different cultures and civilizations.

The following ideas, leading to concrete action, emerged in a particularly striking manner:

—cultural diversity constitutes the raw material necessary for genuine dialogue. Without this fundamental prerequisite, so crucial to any exchange between peoples, cultures and civilizations, no attempt at international cooperation and mutual understanding is possible. In this context, encounters between civilizations occur through time and particularly over long periods. Civilizations do not clash; instead it is the "ignorance of civilizations" that can lead to conflict. For instance, an examination of founding myths, often considered to be graven in stone, demonstrates that they owe much to the exchanges and common aspirations of humanity. Similarly, science, which was long considered incompatible with religion and spirituality, proved, on the basis of theories put forward in the twentieth century, the existence of an unknown omnipresent zone or factors that influence the concepts of nature, the human being and the latter's role in nature. This notion of an unknown zone or factors constitutes a common foundation for two manifestations of the thought process, namely science and the intangible spiritual dimension: at this point a dialogue between the two can begin.

—Dialogue, a means of verifying the validity of an idea shared by two or more people willing to confront their logical systems, is a difficult undertaking because the speaker runs the risk of witnessing his ideas transformed. Dialogue becomes an ever-evolving means of reviving the thought process, calling into question convic-

tions and progressing from discovery to discovery. Therefore we should reaffirm the merits of dialogue as an exercise in displacement, confrontation, testing and transformation. The emphasis should be placed on dialogue's remedial powers as a means of decentring and stepping outside of one's cultural origins so as to plunge into a transversal dimension. In this way, we may go from a "dialogue of civilizations" to a "civilization of dialogue".

—Cultural transfers most often take place in a given context according to real or created needs. Modernity, understood as the critical integration of outside cultures, has been associated very often with the notion of these transfers. In this way, a "cultural synthesis" between cultures and civilizations develop. In this regard, the role of languages and translation has been strongly reaffirmed. It is therefore necessary to define the conditions and means of dialogue so that encounters and exchanges may be productive. In this context, the importance of mediators in cultural transfers becomes evident: the mediator transports and transforms components that evolve as they are borrowed.

—the concept of "Roads" as the ideal platforms for dialogue—enriched by UNESCO's long experience—offers not only a history and roadmap of intercultural dialogue over the centuries; it also contributes to our thinking about the future: the somewhat forgotten encounters and interactions serve to illustrate that the intercultural processes in question existed long before the current debate.

—nomadism, taken literally and metaphorically, offers a new line of thinking, owing to its similarities with the complex and scattered nature of cultural exchanges resulting from globalization: nomadism is characterized not so much by the need to perpetually move but rather by a predominant dispersion as opposed to agricultural exploitation and accumulation. This dispersion forces nomadic peoples to create a network of solidarity and constant exchange, which, rather than uprooting and isolating them from their homelands, enables them to continuously re-appropriate their

lands. It is all the more crucial to consider the uniqueness of places and environments at the present time when globalization increases the risks of cultural standardization as well as the risks of an overall uprooting of civilization from its natural foundation: Earth. Similarly, the attachment to one's original culture is enriched from contacts with other cultures, which ensure culture's lasting vitality and prevent it from attaining a state of disastrous sclerosis.

—the "civilization based on beauty" and the aesthetic field were regarded as a promising axis that would make it possible to break the deadlock on certain issues or to exploit the discourse on the "good" and the "true" upheld by ideological presuppositions. In the context of the current crisis of doctrines founded on the concepts of "good" and "truth", beauty appears to offer a means of going beyond axiological views. Owing to their sensitive and transferable nature, beauty and the aesthetic sphere seem to offer the most fertile domain for cultural exchanges, which have been intensified by the accelerated pace of globalization. This has been demonstrated by the recent adoption of the Convention for the Protection and Promotion of the Diversity of Cultural Expressions.

Human existence must be reconsidered beyond the limitations of the modern individual: according to the paradigm of "Being toward life", existence is conveyed towards the future by virtue of its transversal and social dialogic dimension, which also obliges it to sustain life cycles within the biosphere.